

高齢者の社会的活動と関連要因

シルバー人材センターおよび老人クラブの登録者を対象として

オサ ダ ヒサ オ スズ キ タカ コ
長田 久雄* 鈴木 貴子^{2*}
タカ タ カズ コ ニシタ アキトシ
高田 和子^{3*} 西下 彰俊^{4*}

目的 シルバー人材センターおよび老人クラブに登録している高齢者を対象として、主な社会的活動項目の分類を行い、性別・年齢別による比較と1年間の活動量の変化、QOL 質問票との関連について検討を行った。

方法 東京都 A 区のシルバー人材センターおよび老人クラブ会員に対して、地域における社会的活動ならびに QOL に関する自己記述式調査を行った。翌年も同様の調査を行い、両年ともに回答の得られた1,334人を対象に分析を行った。調査方法は、初年は簡易面接にて回答をしてもらい、翌年は郵送法による調査票の郵送・返却を行った。

まず社会的活動項目について探索的因子分析を行い、信頼性の検討を行った。次に、確認された社会的活動の各因子の得点ならびに QOL 質問票について、性別、年齢別に t 検定、一元配置分散分析を行った。また、1年後の再調査における社会的活動項目の変化についても検討した。

結果 社会的活動に関する項目が4因子全14項目であることが確認され、同時にモデルの信頼性が確認された。4つの因子は、「地域活動への参加」、「親戚・友人を訪問」、「集団活動への参加」、「趣味活動」であった。各因子の Cronbach の α 係数は $r=0.73\sim 0.87$ であり、信頼性が確認された。

性別、年齢別の比較では、「親戚・友人を訪問」($t=4.70$, $P<.001$), 「趣味活動」($t=2.14$, $P<.05$) で女性より男性の活動頻度が有意に高く、また年齢差では女性の「親戚・知人を訪問」の頻度が70-74歳で有意に高かった ($F=4.61$, $P<.01$)。また1年後の再調査では、男女いずれにおいても因子別・年齢別において中程度以上の相関が確認された ($r=0.58\sim 0.88$)。

社会的活動の各因子は、男女ともに QOL 質問票の「精神的活力」($r=0.10\sim 0.59$) と、また女性では社会的活動の各因子と QOL 質問票の「人的サポート満足感」($r=0.15\sim 0.44$) と主に関連がみられた。

結論 地域高齢者の主な社会的活動として4因子14項目が抽出され、信頼性が確認された。また、性別、年齢別による社会活動の頻度の違いが明らかとなった。今後は地域差や予防的観点を含めた心理的・身体的健康との関連についてさらに検討する必要がある。

Key words : 地域高齢者, 社会的活動, QOL 質問票

I 緒 言

総務省統計局¹⁾によると、日本の65歳以上の人口は2005年(平成17年)9月現在の推計で、総人口の20.0%にあたる2,556万人となり、5人に1人が高齢

者となることが明らかとなった。内訳は男性が1,081万人(男性人口の17.4%), 女性が1,475万人(女性人口の22.5%)となっている。このまま高齢化が進めば、2015年には総人口に占める高齢者の割合が26.0%にまでのぼると推測されており、4人に1人以上が高齢者となる超高齢社会が現実のものとなるかもしれない。国際的にみても、総人口に占める高齢者人口の割合は日本が最も高い水準であることがうかがえる。

急速に進む高齢化社会の中で、2007年7月に厚生

* 桜美林大学大学院老年学研究科

^{2*} 早稲田大学保健センター

^{3*} 独立行政法人国立健康・栄養研究所

^{4*} 東京経済大学

連絡先: 〒160-0004 新宿区四谷 1-21

桜美林大学大学院老年学研究科 長田久雄

労働省²⁾が発表した平成18年「簡易生命表」によると、日本人の平均寿命は、男性79.00歳（長寿世界第2位）、女性85.81歳（同1位）であることが明らかとなった。男性の20.6%、女性の43.9%が90歳まで生きる可能性があると言われている。

このように年々寿命が延び、また1960年代から用いられている「いかにして健康的で生きがいを持ち、満足な人生を送るか」という概念をもつ「サクセスフル・エイジング」の考え方を基に、近年少しずつ研究が行われるようになった。1990年代後半からは、WHO（世界保健機関）が「アクティブ・エイジング」という言葉を積極的に使うようになり、2002年の「国連第2回世界高齢化会議」にて討議資料が提出された³⁾。それによると、「アクティブ・エイジング」とは、①単に身体的に活動的であるということではなく、②社会的、経済的、精神的、文化的、政治的な事柄に継続的に参加・関与することを通じて、家族、友人、地域、社会に貢献する、③自立、参加、尊厳、優しさ、自己充実を原則とし、④世話される対象から権利の主体へ、と説明されている。「アクティブ・エイジング」は、サードエイジつまり子育ての終了や退職後の「達成、完成、充実の時期」に社会とのかかわりを持ち、最終的に「サクセスフル・エイジング」の実現を可能とすることと考えられる。

そのような中、高齢期における社会との関わりの研究が行われるようになってきている⁴⁻⁸⁾。石川・原⁴⁾は、社会活動に参加している高齢者の健康意識と健康習慣に関する調査を行い、健康習慣（睡眠・朝食・食事バランス・感触・塩分・酒・タバコ・運動）と健康気遣いとの割合を検討した。75%以上の高齢者の普段の生活の中に運動が積極的に取り入れられており、そのような好ましい健康習慣をもつ人は、健康への気遣いがあることを明らかにしている。また高齢者の社会的・個人的活動の状況について検討を行った研究⁵⁾では、健康な高齢者は、ボランティア活動、旅行、友達との会話、外食などの社会的・個人的活動が極めて活発であると述べている。地域のサロン参加が自尊感情に及ぼす影響についての北村・臼井・筒井の研究⁶⁾では、高齢者自身が健康であると感じるほど、また参加頻度の高い人ほど自尊感情の得点が高いことを明らかにしている。

井上ら⁷⁾は、地域健康高齢者の社会活動と身体機能との関連について検討している。その結果、前期高齢者と後期高齢者では社会活動の中の個人的活動（近所づきあい、近所での買い物、デパート、近くの友人訪問、遠くの友人訪問、国内旅行、海外旅行、お寺参り、スポーツ、レクリエーション）にお

いて、得点に有意な差がみられた。また後期高齢者は前期高齢者よりも社会活動と身体機能とに高い関連があることが明らかになると同時に、社会活動維持のために総合的なアプローチの必要性を言っている。社会活動の指標としては、橋本ら⁹⁾の「社会活動状況の指標」や尾島ら¹⁰⁾による「いきいき社会活動チェック表」が開発されている。

しかしながらこれまでの高齢者の社会的活動に関する研究においては、全ての指標の妥当性・信頼性が十分であるとは言えないこと、また性差や年齢差、そして活動の継続性について検討されていないことが課題として考えられる。

そこで本研究では、橋本ら⁹⁾の高齢者の社会的活動に関する質問票の内容を追試し、その信頼性を検討することを第一の目的とする。社会活動や対人交流を比較的活発に行っていると考えられるシルバー人材センターと老人クラブに登録している高齢者を対象として主な社会的活動の実態を明らかにすることは、高齢者の生活の現状の一端を理解する上で重要であると考えられる。

また社会活動調査票の信頼性・妥当性を確認した上で性差や年齢差、社会的活動の継続性について検討するとともに、同時期に実施したQOL質問調査票と社会活動との関連についても検討する。これらの検討を行うことにより、単に社会的活動の内容だけでなく、サクセスフルエイジングに向けたマンパワー活用につながる示唆が得られると考える。

なおシルバー人材センターと老人クラブの登録者を対象とした理由としては、一般的な地域高齢者では社会活動の頻度が低い場合に要因分析が困難になる可能性があり、これに対して登録者は社会活動を活発に行っていると考えられ、一定レベルの活動量が見込まれるためであった。

II 研究方法

1. 対象

東京都A区のシルバー人材センター登録者および老人クラブに所属する60歳以上の3,357人に自己記述式調査票を配布し、1,924人（回収率57.31%）より回収された。この1,924人のうち、初回調査時に追跡調査の承諾が得られた1,566人に対して再度次年度に調査用紙を配布し、1,360人より回答を得た。回収率は86.85%であった。最終的に、回答者1,360人のうち、年齢、性別が未記入の回答者、ならびに60歳以下であった回答者合計26人を除く1,334人を分析対象者とした。対象者の初回調査の属性は、男性は60～90歳の916人（平均年齢70.92歳、SD=4.98歳）、女性は60～104歳の418人（平均年齢

69.11歳, SD=5.74歳)であった。

2. 調査方法および期間

初回調査は、平成14年12月から平成15年2月に郵送し、その後指定場所にて簡易面接を行った。また、2回目の調査を翌年の平成16年1月より平成16年2月に郵送法にて行った。初回、2回目の調査とも、配布した調査票には、本調査の目的、ならびに個別結果は個人の特定が行われないように公表しない旨記載された説明文を同封した。調査に協力いただける場合のみ、調査への同意として調査票へ記名してもらった。

3. 調査内容

地域高齢者が日常体験している社会的活動項目を先行研究¹⁰⁾を参照し、高齢者を対象とした研究を専門とする筆者らが考案し、34項目にまとめた(付表1)。回答方法は、「まったくしていない」(1点)から「いつもしている」(4点)の4件法で回答を求め、もっとも近い回答に○(マル)をつけてもらった。

またQOL質問票は、太田ら¹¹⁾によって標準化され、地域高齢者の総合的、基本的なQOL評価に有用であると考えられた指標である。質問票は19項目から構成され、生活活動力(5項目)、健康満足度(3項目)、人的サポート満足感(3項目)、経済的ゆとり満足感(2項目)、精神的健康(3項目)、精神的活力(3項目)の6つの因子で構成されている。各項目は「はい」(1点)、「いいえ」(0点)の2件法であり、いずれか該当する方に○(マル)をつけてもらった。

4. 分析方法

1) 主な社会的活動の項目分類については、初回調査時のデータをもとに、筆者らが考案した社会的活動項目全34項目に対して男女一括投入し、因子間の相関が $r=0.40$ 以上となった因子がみられたことから、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。分析過程では、多重因子パターン項目の削除と、解釈可能性を考慮しながら因子数の調整を行った。最終的に因子負荷量は 0.40 以上とした。

また因子分析の実施が適切であるか否かを判断するため、KMO(Keiser-Meyer-Olkin)の標本妥当性の測度、Bartlettの球面性検定にて検討を行った。抽出された因子の内的整合性の指標としては、Cronbachの α 係数を求めるとともに、各因子内の項目の影響を検討するために各項目の α If Item Deleted(該当項目が削除された場合のCronbachの α 係数)も求めた。

2) 1)にて標準化された社会的活動項目の因子ごとに合計得点を算出し、t検定にて性差を検討した。因子ごとについてLevene等分散性の検討を行

表1 初回調査時の対象者の年齢分布

人(%)					
	60-64歳	65-69歳	70-74歳	75-79歳	80歳以上
男性	78 (8.67)	289 (32.11)	333 (37.00)	151 (16.78)	49 (5.44)
女性	75 (18.12)	171 (41.30)	105 (25.36)	40 (9.66)	23 (5.56)
計	900 (100.00)				414 (100.00)

い、有意差が確認された因子についてはWelchの修正検定を行った。

3) 初回調査の年齢をもとに、性別ごとに「60-64歳」、「65-69歳」、「70-74歳」、「75-79歳」、「80歳以上」の5つの年齢に分類した(表1)。なお、女性の年齢の分類については、「80歳以上」の対象者が23人と少なかったため、以後「75-79歳」の40人とまとめ、「75歳以上」として分析することとした。またQOL質問票との比較を行うため、QOL質問票に回答しなかった対象者(男性16人、女性4人)は除いて、分析を行った。

また表2の分類をもとに、男女それぞれにおける年齢別、因子別に分析を行った。その後一元配置分散分析を行い、有意であった因子に対して多重比較検定(TukeyのHSD法: Tukey's Honestly Significant Difference)を行うことで、年齢による得点の比較・検討を行った。

4) 初回調査時の結果をもとに、性別・年齢別、社会的活動の因子別にPearsonの積率相関係数を用いて検討した。

5) 初回調査時と翌年の2回目調査時の社会的活動の頻度について、性別・年齢別に、社会的活動の各因子とQOL質問票の各因子についてPearsonの積率相関係数を用いて検討した。

なお全ての分析には、Microsoft Excel 2003およびSPSS ver.14.0を使用した。

5. 倫理面への配慮

調査時には、調査の趣旨と内容の説明、協力を求める文書を添付した。調査用紙は、調査に同意した対象者だけに提出を求めた。調査データの入力・分析にあたっては、ID番号によって作成されたデータベースを使用し、対象者の氏名、住所など個人が特定できないような厳重な管理を行った。

III 研究結果

1. 因子分析と信頼性の検討

因子分析の結果、4因子合計14項目が得られた。第I因子は「Q14. 町内会や自治会の活動」、「Q15. 町内会や自治会役員として活動」など3項目であ

表2 初回調査時の社会的活動項目における因子パターン行列（最尤法プロマックス回転）

社会的活動項目	因子パターン				共通性	α If Item Deleted*)
	I	II	III	IV		
第Ⅰ因子：地域活動への参加（ $\alpha=0.870$ ）						
Q14 町内会や自治会の活動	1.04	-0.00	-0.11	-0.01	0.94	0.75
Q15 町内会や自治会役員として活動	0.79	-0.03	0.13	-0.07	0.70	0.81
Q13 地域の行事の参加	0.55	0.07	0.10	0.17	0.57	0.88
第Ⅱ因子：親戚・友人を訪問（ $\alpha=0.780$ ）						
Q5 近くの親戚を訪問する	0.01	0.75	-0.08	-0.02	0.50	0.73
Q7 遠くの親戚を訪問する	-0.01	0.73	-0.10	0.02	0.49	0.73
Q6 遠くの友人を訪問する	-0.07	0.66	0.15	0.01	0.51	0.71
Q4 近くの友人を訪問する	0.09	0.55	0.11	0.03	0.45	0.74
第Ⅲ因子：集団活動への参加（ $\alpha=0.737$ ）						
Q24 市民活動など団体への参加	0.05	-0.06	0.81	-0.03	0.63	0.62
Q22 市民講座などへの参加	-0.07	-0.01	0.60	0.15	0.43	0.67
Q25 政治団体への参加	-0.01	0.13	0.60	-0.11	0.36	0.71
Q32 各種協議会の委員	0.06	-0.07	0.55	0.01	0.32	0.71
第Ⅳ因子：趣味活動（ $\alpha=0.725$ ）						
Q12 レクリエーション活動	-0.01	-0.02	0.02	0.87	0.75	0.52
Q11 スポーツや運動	-0.03	0.04	-0.08	0.63	0.35	0.71
Q17 趣味の会など仲間内の活動	0.03	-0.01	0.08	0.58	0.42	0.68
因子相関						
	II	0.40				
	III	0.63	0.49			
	IV	0.50	0.49	0.62		

^{*)} α If Item Deleted；該当項目が削除された場合の Cronbach の α 係数

り、対象者の居住地域での活動を中心とした項目であったため、「地域活動への参加」と命名した。第Ⅱ因子は「Q5. 近くの親戚を訪問する」、「Q6. 遠くの友人を訪問する」といった親戚や友人への訪問に関する4項目であり、「親戚・友人を訪問」と命名した。また第Ⅲ因子は、「Q24. 市民活動など団体の参加」、「Q25. 政治団体への参加」など政治団体（後援会）や市民講座など団体での活動に関する4項目であり、「集団活動への参加」と命名し、第Ⅳ因子は「Q12. レクリエーション活動」、「Q11. スポーツや運動」など趣味に関する活動項目3項目であったため、「趣味活動」と命名した。 α 係数は、第Ⅰ因子「地域活動への参加」 $\alpha=0.870$ 、第Ⅱ因子「親戚・友人を訪問」 $\alpha=0.780$ 、第Ⅲ因子「集団活動への参加」が $\alpha=0.737$ 、第Ⅳ因子「趣味活動」が $\alpha=0.725$ と全体的に低めながら0.70以上であることが確認され、 α If Item Deletedにおいても因子内における各項目の重要性が確認された（表2）。またKMO（Keiser-Meyer-Olkin）の標本妥当性の測度は0.870、Bartlettの球面性検定は7016.18（ $P<.001$ ）であり、本研究のデータによって因子分析を行うことが適切であること、観測変数間に関連があること

が明らかとなった。因子間の相関を、Pearsonの積率相関係数を用いて検討した結果、第Ⅰ因子「地域活動への参加」と第Ⅱ因子「親戚・友人を訪問」では $r=0.40$ とやや弱い相関であったが、その他の各因子間では中程度の相関が確認され、特に第Ⅰ因子「地域活動への参加」と第Ⅲ因子「集団活動への参加」、第Ⅲ因子「集団活動への参加」と第Ⅳ因子「趣味活動」では0.60以上の相関が確認された。なお、いずれの相関係数も有意であった（ $P<.001$ ）。

2. 調査対象者の年齢

最も多かった年代は、男性が70-74歳の333人であり、男性全体の37.00%であった。また女性では65-69歳が最も多く、171人（41.30%）であった（表1）。なお、男性の対象者の合計は女性の対象者の合計の2倍以上の人数であった。

3. 社会的活動各因子における性差

1. で明らかとなった社会的活動に関する4因子について、初回調査の結果を基に性差を検討するためt検定を行った（表3）。等分散性のためのLeveneの検定では、「趣味活動」において有意な差がみられ（ $P<.05$ ）、得点分布に偏りが確認されたため、Welchの修正検定を行った。

表3 初回調査時の下位尺度得点における性差

下位尺度		男性 (N=900)	女性 (N=414)	等分散性	t 値
				(F)	
地域活動への参加	M	6.78	7.07	2.06	-1.71 [†]
	SD	2.95	2.81		
親戚・友人を訪問	M	9.47	10.15	0.00	-4.70***
	SD	2.42	2.40		
集団活動への参加	M	6.58	6.45	2.55	0.85
	SD	2.62	2.45		
趣味活動	M	6.90	7.23	3.88*	-2.14*
	SD	2.44	2.60		

*** $P < .001$, * $P < .05$, [†] $P < .10$ 表4 社会的活動の下位尺度得点における年齢別比較：男性（分散分析，N=900）
（各下位尺度上段：初回調査，下段：2 回目調査）

下位尺度		年 齢					F(4,885)		Tukey's HSD	
		60-64	65-69	70-74	75-79	80-				
地域活動への参加	M	6.83	6.68	6.80	7.09	6.16	1.04	n.s.		
	SD	2.95	2.86	3.03	2.96	2.78				
	M	6.73	6.66	6.72	6.95	6.24	0.57	n.s.		
	SD	3.02	2.95	2.98	3.06	3.02				
親類・知人を訪問	M	9.09	9.54	9.42	9.67	9.38	0.84	n.s.		
	SD	2.23	2.45	2.42	2.32	2.82				
	M	9.70	9.90	9.72	9.86	9.98	0.33	n.s.		
	SD	2.26	2.24	2.36	2.43	2.53				
集団活動への参加	M	6.27	6.36	6.67	7.05	6.36	2.12	n.s.		
	SD	2.46	2.41	2.71	2.87	2.53				
	M	6.41	6.11	6.58	6.84	6.96	2.61	*		65-69<75-79*
	SD	2.40	2.31	2.73	2.87	3.18				
趣味活動	M	6.95	6.86	6.86	7.12	6.68	0.45	n.s.		
	SD	2.15	2.33	2.55	2.40	2.78				
	M	6.71	6.91	6.78	7.01	6.81	0.35	n.s.		
	SD	2.39	2.33	2.50	2.42	2.96				

* $P < .05$

各因子における性差は、「親戚・友人を訪問」($P < .01$), 「趣味活動」($P < .05$)において、いずれも女性の得点が有意に高く、該当因子における社会的活動の頻度が男性よりも女性の方が多いたことがあきらかとなった。「集団活動への参加」では、男性の平均得点が女性の平均得点を上回ったが、性差は確認されなかった。

4. 社会的活動各因子における年齢差

初回調査について一元配置分散分析を行ったとこ

ろ、男性では「地域活動への参加」, 「親戚・知人を訪問」, 「趣味活動」因子の5つの年代すべてにおいて有意差がみられなかった(表4)。また、全ての因子において、75-79歳の得点が高他の年代の得点よりも高く、活動頻度が高いことが明らかになった。

翌年の2回目調査時の得点では、一元配置分散分析にて「集団活動への参加」に有意差が認められたため($P < .05$)、それぞれ多重比較検定を行った。その結果、初回調査と同様に「集団活動への参加」

表5 社会的活動の下位尺度得点における年齢別比較：女性（分散分析，N=414）
（各下位尺度上段：初回調査，下段：2回目調査）

下位尺度		年 齢				F(3,410)		Tukey's HSD
		60-64	65-69	70-74	75-			
地域活動への参加	M	7.23	6.92	7.59	6.46	2.44	n.s.	
	SD	2.53	2.73	3.07	2.82			
	M	7.28	6.81	7.49	6.92	1.54	n.s.	
	SD	2.71	2.65	2.91	2.77			
親類・知人を訪問	M	10.38	9.88	10.78	9.57	4.61	**	65-59<70-74* 70-74>75-**
	SD	2.32	2.20	2.35	2.88			
	M	10.32	10.47	10.96	9.97	2.56	n.s.	
	SD	2.25	2.34	2.13	2.63			
集団活動への参加	M	6.58	6.38	6.69	6.10	0.83	n.s.	
	SD	2.36	2.40	2.45	2.72			
	M	6.28	5.99	6.58	6.43	1.52	n.s.	
	SD	2.32	2.11	2.52	2.60			
趣味活動	M	7.35	7.11	7.64	6.74	1.77	n.s.	
	SD	2.77	2.47	2.70	2.55			
	M	7.34	7.05	7.65	7.02	1.24	n.s.	
	SD	2.76	2.78	2.56	2.48			

** $P<.01$, * $P<.05$

において、前年同様65-69歳が75-79歳より活動頻度が低く、得点が有意に低かった（ $P<.05$ ）。

女性でも同様に初回調査の得点を用いて一元配置分散分析を行ったところ、「親戚・知人を訪問」で有意差（ $P<.01$ ）がみられたため、Tukey's HSDによる多重比較検定を行った（表5）。その結果、「親戚・知人を訪問」では、65-69歳が70-74歳より得点が有意に低く（ $P<.05$ ），同様に75歳以上が70-74歳より有意に得点が低かった（ $P<.01$ ）。男性の結果と同様、有意差の有無に関わらず各因子の得点について検討すると、70-74歳のみ全ての因子において他の年代より得点が高いことが明らかとなった（表5）。

翌年の2回目調査時の得点では、年齢差は確認されなかった。

5. 社会的活動の継続性

初回調査時と2回目調査時の活動頻度の関連について検討したところ、表6のように男女ともいずれの因子、年代においても中程度以上の相関が見られ、有意であった（ $P<.001$ ）。多くの因子、年代では強い相関がみられたものの、男性では「親戚・知人を訪問」において75-79歳を除き中程度の相関にとどまった。その一方で「地域活動への参加」では、全ての年代で $r=0.80$ 以上であった。女性では「親

表6 初回調査時から2回目調査時までの社会的活動の継続：男性（Pearsonの積率相関係数）

下位尺度	年 齢				
	60-64	65-69	70-74	75-79	80-
地域活動への参加	0.80***	0.83***	0.81***	0.81***	0.88***
親戚・知人を訪問	0.58***	0.68***	0.67***	0.74***	0.64***
集団活動への参加	0.70***	0.77***	0.70***	0.78***	0.74***
趣味活動	0.71***	0.71***	0.72***	0.74***	0.86***

*** $P<.001$

表7 初回調査時から2回目調査時までの社会的活動の継続：女性（Pearsonの積率相関係数）

下位尺度	年 齢			
	60-64	65-69	70-74	75-
地域活動への参加	0.71***	0.72***	0.84***	0.72***
親戚・知人を訪問	0.68***	0.63***	0.59***	0.68***
集団活動への参加	0.65***	0.65***	0.66***	0.67***
趣味活動	0.82***	0.86***	0.81***	0.69***

*** $P<.001$

戚・知人を訪問」,「集団活動への参加」の2つの因子において,全ての年代で $r=0.59\sim0.68$ の中程度の相関にとどまった(表7)。「趣味活動」因子では75歳以上の対象者が $r=0.69$ であったものの,それ以外の年代は $r=0.80$ 台と強い相関が確認された。

全体としては,「地域活動への参加」,「集団活動への参加」では男性の相関係数が女性より高く,女性は「趣味活動」で男性よりも相関係数が高かった。

6. 社会的活動とQOLとの関連

男性では全体を通して強い相関はみられなかった。中程度の相関は,社会的活動因子の「親戚・知人を訪問」の60-64歳がQOL質問票の「健康満足度」,「人的サポート満足感」,「精神的健康」,「精神的活力」で確認され,同じく「親戚・知人を訪問」の80歳以上がQOL質問票の「精神的活力」と中程度の相関が認められた。また,「集団活動への参加」では,80歳以上で「経済的ゆとり満足度」,「精神的活力」と,「趣味活動」でも同じく80歳以上で「生活活動力」,「経済的ゆとり満足度」と中程度以上の相関が確認された。「趣味活動」では,その他にも75-79歳で「経済的ゆとり満足度」と中程度の相関

が認められたのに加え,「趣味活動」の全ての年代とQOL質問票の「精神的活力」においても中程度の相関が確認された(表8)。

女性では,男性同様強い相関がみられなかった(表9)。中程度の相関は,社会的活動の「地域活動への参加」において,60-64歳でQOL質問票の因子「人的サポート満足感」と「精神的健康」にみられた。また社会的活動の因子において,75歳以上が「精神的活力」と中程度の相関があった。その他社会的活動の「親戚・知人を訪問」では,60-64歳がQOL質問票の「人的サポート満足感」,「経済的ゆとり満足感」と,75歳以上がQOL質問票の「人的サポート満足感」と,全ての年代とQOL質問票「精神的活力」がそれぞれ中程度の相関があった。社会的活動の「趣味活動」とQOL質問票の「精神的活力」については,全ての年代で相関係数が0.50以上となった。また,社会的活動とQOLの双方の因子において,とくに男女とも各年代で「趣味活動」と「精神的活動」において中程度の相関が確認された。

表8 初回調査時の社会的活動とQOLとの関係:男性(Pearsonの積率相関係数)

下位尺度	年齢	QOL 質問表											
		生活活動力		健康満足感		人的サポート満足感		経済的ゆとり満足感		精神的健康		精神的活力	
地域活動への参加	60-64	0.19	↑	0.19	n.s.	0.16	n.s.	0.11	n.s.	-0.32	**	0.32	**
	65-69	0.05	n.s.	0.02	n.s.	0.18	**	0.03	n.s.	-0.13	*	0.10	n.s.
	70-74	0.17	**	0.22	***	0.11	*	0.14	*	-0.13	*	0.13	*
	75-79	0.13	n.s.	0.15	↑	0.20	*	0.21	*	-0.22	**	0.26	**
	80-	0.19	n.s.	0.21	n.s.	0.17	n.s.	0.03	n.s.	0.01	n.s.	0.39	**
親戚・知人を訪問	60-64	0.22	↑	0.48	***	0.42	***	0.32	**	-0.40	***	0.45	***
	65-69	0.11	↑	0.08	n.s.	0.24	***	0.23	***	-0.21	***	0.24	***
	70-74	0.18	**	0.30	***	0.32	***	0.21	***	-0.24	***	0.29	***
	75-79	0.19	*	0.14	↑	0.06	n.s.	0.18	*	-0.24	**	0.23	**
	80-	0.38	**	0.29	n.s.	0.08	n.s.	0.31	*	-0.26	↑	0.56	***
集団活動への参加	60-64	0.15	n.s.	0.05	n.s.	0.11	n.s.	0.11	n.s.	-0.28	*	0.33	**
	65-69	-0.01	n.s.	0.09	n.s.	0.08	n.s.	0.08	n.s.	-0.18	**	0.16	**
	70-74	0.17	**	0.19	***	0.15	**	0.09	n.s.	-0.22	***	0.30	***
	75-79	0.07	n.s.	0.08	n.s.	0.14	↑	0.18	*	-0.21	*	0.30	***
	80-	0.28	↑	0.22	n.s.	0.21	n.s.	0.47	**	-0.28	↑	0.46	**
趣味活動	60-64	0.27	*	0.19	n.s.	0.24	*	0.25	*	-0.25	*	0.43	***
	65-69	0.05	n.s.	0.22	***	0.12	↑	0.19	**	-0.21	***	0.41	***
	70-74	0.18	**	0.36	***	0.23	***	0.21	***	-0.26	***	0.43	***
	75-79	0.11	n.s.	0.24	**	0.25	**	0.41	***	-0.29	***	0.50	***
	80-	0.45	**	0.33	*	0.16	n.s.	0.40	**	-0.24	n.s.	0.48	**

*** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$, † $P<.10$

表9 初回調査時の社会的活動とQOLとの関係：女性（Pearsonの積率相関係数）

下位尺度	年齢	QOL 質問表											
		生活活動力		健康満足感		人的サポート満足感		経済的ゆとり満足感		精神的健康		精神的活力	
地域活動への参加	60-64	-0.08	n.s.	0.24	*	0.40	***	0.36	**	-0.43	***	0.33	**
	65-69	0.00	n.s.	0.24	**	0.15	†	0.19	*	-0.15	†	0.11	n.s.
	70-74	0.14	n.s.	0.09	n.s.	0.24	*	0.14	n.s.	-0.16	n.s.	0.33	***
	75-	0.35	**	0.29	*	0.35	**	0.22	†	-0.25	†	0.53	***
親戚・知人を訪問	60-64	0.02	n.s.	0.12	n.s.	0.44	***	0.01	n.s.	-0.46	***	0.46	***
	65-69	0.03	n.s.	0.18	*	0.18	*	0.25	**	-0.02	n.s.	0.28	***
	70-74	0.23	*	0.27	**	0.34	***	0.20	*	-0.22	*	0.21	*
	75-	0.35	**	0.19	n.s.	0.41	**	0.21	†	-0.37	**	0.55	***
集団活動への参加	60-64	-0.17	n.s.	0.04	n.s.	0.18	n.s.	-0.01	n.s.	-0.16	n.s.	0.28	*
	65-69	0.08	n.s.	0.28	***	0.16	*	0.12	n.s.	-0.15	†	0.24	**
	70-74	0.02	n.s.	0.15	n.s.	0.15	n.s.	0.19	†	-0.23	*	0.29	**
	75-	0.21	n.s.	0.27	*	0.25	†	0.18	n.s.	-0.20	n.s.	0.31	*
趣味活動	60-64	-0.03	n.s.	0.20	†	0.44	***	0.29	*	-0.42	***	0.59	***
	65-69	-0.06	n.s.	0.31	***	0.18	*	0.36	***	-0.17	*	0.55	***
	70-74	0.13	n.s.	0.18	†	0.18	†	0.33	***	-0.32	**	0.59	***
	75-	0.27	*	0.19	n.s.	0.20	n.s.	0.32	*	-0.14	n.s.	0.51	***

*** $P < .001$, ** $P < .01$, * $P < .05$, † $P < .10$

IV 考 察

1. 因子構造と α 係数、因子間の相関について

本研究では因子間に相関があり、斜交回転である最尤法プロマックス回転を用いて、地域高齢者の主な社会的活動の分類を行った。その結果、「地域活動への参加」、「親戚・知人を訪問」、「集団活動への参加」、「趣味活動」の4因子に分類された。その中で「地域活動への参加」については、「Q14. 町内会や自治会の活動」において因子負荷量が1.04となっている。通常、負荷量は ± 1.00 の範囲内にとどまるとされるが、斜交回転ゆえ多少のゆがみが考えられ、負荷量が ± 1.00 を超えることは十分考えられた。また「地域活動への参加」については分析の途中で因子負荷量は0.40以上であったものの、「Q34. 研修会・講座などの講師」、「Q29. 宗教団体の活動」で共通性が1.00台、あるいは1.00未満であった。これら2項目は限られた特定の個人が行っている場合が多いと考えられ、そのために特殊な項目として位置づけられた可能性がある。

またKMO, Bartlettの球面性検定により、因子分析の実施が適切であると確認された。4つの因子それぞれの因子負荷量も十分に高く、 α 係数は0.73～0.87とまとまりの良さが明らかとなり、本研究の結果が地域高齢者の主な社会的活動を十分説明してい

ると考えられた。

このたびの因子分析では考案された34項目から半数以下の14項目が抽出されたが、考案された全34項目は実際に高齢者が行っているとされる項目である。今後いわゆる団塊の世代などの高齢化やその時々時代の流れにより、項目の入れ替わりがあることは当然考えられるので、今後継続的な検討が必要であろう。

因子間の相関係数は、 $r=0.40\sim 0.63$ と中程度の関連がみられた。相関係数がとくに高かったのは、「地域活動への参加」と「集団活動への参加」、「集団活動への参加」と「趣味活動」であった。集団活動の中には、「Q24. 市民活動など団体への参加」や「Q32. 各種協議会の委員」といった地域活動と考えられる項目が含まれており、また「Q22. 市民講座などへの参加」のように趣味活動も含まれていると考えられる。これらの理由から「地域活動への参加」と「趣味活動」が「集団活動への参加」と比較的高い中程度の相関となったと言えるだろう。

2. 性別による特徴

因子ごとに性差の検討を行った結果、「集団活動への参加」以外の因子において男性より女性の得点が高く、女性の方が男性より活動頻度が高いことが明らかとなった。とくに「親戚・友人を訪問」、「趣味活動」においては男性の得点が有意に低かった。

一般的に女性の方が社交的・活動的であるイメージを持ちやすいと考えられるが、本研究においても女性の方が他者との交流や趣味にかかわっている可能性が明らかとなった。

3. 年齢別の特徴

4 因子それぞれについて、男女別に年齢差の検討を行った。

男性では有意差は認められなかったものの、ほぼ全ての因子において、75-79歳の得点のみ他の年代より得点が高く、活動量が高いことが考えられた。また、80歳以上ではいずれの因子においても1年後の活動頻度の得点が増加しており、活動頻度が維持または増加していることが明らかとなった。通常、男性の平均寿命近辺の年齢では身体機能低下の可能性が考えられるが、本研究ではその詳細は明らかになっていない。

女性では、「親戚・知人を訪問」にて初回、2回目調査ともに有意差が確認され、その後の多重比較検定では初回調査の70-74歳が65-69歳と75歳以上の群に比べ得点が高いかった。2回目調査でも70-74歳の得点が最も高くなっていた。女性で男性と同様、70-74歳という特定の年代において全ての因子で得点が高く、活動頻度が多いと考えられた。他の因子でも70-74歳の得点が各年代の中で最も高かった。女性の場合は平均寿命まで年数があると考えられるが、この年代が他の年代より活動量が高い理由を考える上で、身体機能の低下、心理学的要因、ライフイベント、デイリーハラスルスなどに対する予防や対処能力の影響も考慮する必要があると考える。

以上のことから、今後は単に「高齢者」あるいは「前期高齢者」、「後期高齢者」といった比較的大きな年代で捕らえるのではなく、より細かい年代に区分し検討する必要があるだろう。

4. 1年後の社会的活動継続性

男性ではいずれの年代においても「地域活動への参加」で $r=0.80$ 以上の高い相関が認められた。各年代ともに関連が低かったのは、「親戚・知人を訪問」であり、 $r=0.58\sim0.74$ と中程度の相関が認められたものの、活動頻度に変動があることが考えられた。また、「2. 年齢別の特徴」にて、75-79歳の群が他の年代と比べて最も得点が高いことが明らかとなったが、継続性においては、 $r=0.74\sim0.81$ と各因子とも比較的同じような係数が得られた。その時々で活動頻度の変動が、他の年代に比べて75-79歳では比較的少ないことが示唆される。

女性では、全体的に相関係数が低かったものの、いくつかの因子・年代で $r=0.80$ 以上の高い相関が

認められた。各年代とも、全ての因子が同じような相関を示すわけではなく、ある因子の相関が高い場合には他の因子の相関がそれほど高くない、といった徴候がみられた。しかし、「趣味活動」においては、ほとんどの年代で $r=0.80$ 以上と高い相関であったにも関わらず、75歳以上の群で中程度の相関にとどまっていることから、今後そのような年代別の特徴を明らかにすることも必要であろう。

5. 社会的活動とQOLとの関係

社会的活動の因子は、QOLの因子「精神的健康」や「精神的活力」と比較的関連があり、性別に関わらず社会的活動における「趣味活動」とQOLにおける「精神的活力」とが全ての年代において中程度の相関が確認された。このことは、個人の好みに合った社会的活動を行うことと一人ひとりの精神的活力に関連があるということを示していると思われる。

6. 調査対象者について

本研究では、シルバー人材センターと老人クラブに登録している高齢者を対象とした。本来地域高齢者を対象とした研究では、諸活動の登録如何に係わらず一般的な在宅高齢者を対象に行うことが望ましい。しかしながら「I 緒言」でも述べた通り、一般的な地域高齢者を対象とする場合は社会活動の頻度が低い可能性が考えられる。本研究は社会活動の有無を検討する研究ではないことから、元々一定の社会活動を行っている高齢者を調査対象者として設定した。

V 結 語

本研究では、地域高齢者を対象として、地域における主な社会的活動について検討した。34の原項目からなる社会的活動項目は、最終的に4因子14項目にまとめられ、「地域活動への参加」、「親戚・友人を訪問」、「集団活動への参加」、「趣味活動」に分類された。調査票の信頼性が確認されたことから、たとえば買い物のようなADLも含まれる個人活動に比べ、より人と人が関わる社会的活動が高齢者全体で行われていると考えられた。

また社会的活動の因子別に性差、年齢差、継続性について検討し、さらには社会的活動の4因子とQOL質問票の因子との関連についても検討したところ、性差はほとんど確認されなかった。しかしながら、年齢差では男性では75-79歳、女性では70-74歳で他の年代よりも社会的活動の頻度がやや多いことが示唆されたことから、今後は前期高齢者、後期高齢者といった区分ではなく、年齢別により詳しい検討が行われることが望まれる。

高間ら^{12,13)}は高齢者が地域のサークル参加と社会

活動内容について、各種サークルが社会参加活動内容とかかわりが強く、サークルで得られた経験が高齢者の生活や生き方に影響を及ぼすこと、付き合いで行っているのではなく、自分のために目的意識を持った活動を選んでいることを報告している。また小窪ら¹⁴⁾は、孤独感に関する個人的特性と社会的特性について研究を行い、その中で社会的特性（友人関係、相談相手、近所づきあいなど）が孤独感と関連することを明らかにした。中でも老人クラブや行事への参加の有無ではなく、参加の頻度が孤独感と関連があることを明らかにした。

本研究では、1年後の調査においても同じ因子では中程度の関連が確認されたことから、社会的活動の頻度が1年後には異なっていることも十分考えられるものの、QOL質問票と中程度以上の相関がみられたことにより、社会的活動での経験や継続が対象者の生活や意識に影響を及ぼしている可能性が示唆された。一度始めた社会的活動に対しては、年齢を重ねてもある一定の継続性が見込めると言え、本研究では先行研究の結果と類似した知見が得られたと考えられる。

また、松本¹⁵⁾は在宅高齢者の事例を紹介し、日常生活における外出が持つ意味について「出会い」や「今ここ」について述べ、それらをまとめて「包含」という言葉を提案している。また高齢者を取り巻く「相互作用論（Interaction）」と「相互浸透論（Transaction）」^{16~18)}に触れ、高齢者とその周囲の環境とを切り離さない相互浸透的な理解と研究への応用の重要性を説いている。本研究により、地域高齢者の一般的な活動内容、性別、年齢別の活動量とその継続性が明らかとなり、またその活動がQOL質問票の「精神的活力」や「人的サポート満足感」と関連がみられたことは、高齢者の心の健康や生きがいに社会的活動が少なからず影響していると言えるだろう。高齢者が社会的活動を積極的に行うことにより、高齢者自身の生活と周囲の環境との相互作用がどのように形成されるかの検討を行うことも、これからの高齢者研究の一課題となると思われる。

一方で調査対象者がシルバー人材センターや老人クラブ会員といった比較的積極的に社会活動を行っている高齢者に限られたことから、本研究の結果は本来の意味での地域高齢者の実態を反映しているとは言いがたく、したがって本研究の結果を解釈する上では限界があると考えられる。

今後は調査対象者の偏りに配慮しながら、社会的活動と対象者の年齢差、個人の内面やその現象の背後にある阻害・促進要因、環境などを一つ一つ丁寧に検討することが望まれる。

本研究は、平成14年度から平成16年度にかけて行われた厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業『高齢者の社会参加に関連する要因の解明と支援システム構築に関する研究』における調査研究の一環としておこなわれた。

(受付 2009. 1.26)
(採用 2009.11.17)

文 献

- 1) 総務省統計局. 推計人口. 東京: 総務省, 2005.
- 2) 厚生労働省. 簡易生命表. 東京: 厚生労働省, 2007.
- 3) WHO. Active Aging: a Policy Framework. WHO, 2002.
- 4) 石川みち子, 原 礼子. 社会活動に参加している高齢者の健康意識と健康習慣に関する実態調査. 千葉県立衛生短期大学紀要 1994; 13: 95-99.
- 5) 加藤恵子, 池上久子, 鶴原香代子, 他. 高齢者の日常生活における社会的活動と個人的活動. 名古屋文理短期大学紀要 2001; 26: 27-34.
- 6) 北村隆子, 臼井キミカ, 筒井裕子. 地域サロン参加による高齢者の自尊感情に影響を及ぼす要因. 人間看護学研究 2004; 3: 1-9.
- 7) 井上順一郎, 奥野史也, 小野 玲, 他. 地域在住健康高齢者における社会活動と身体機能の関連性. 神戸大学保健学科紀要 2005; 21: 53-61.
- 8) 西田厚子, 堀井とよみ, 筒井裕子, 他. 自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究. 人間看護学研究 2006; 4: 75-86.
- 9) 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 他. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. 日本公衆衛生雑誌 1997; 44: 760-768.
- 10) 尾島俊之, 柴崎智美, 橋本修二, 他. いきいき社会活動チェック表の開発. 日本公衆衛生雑誌 1998; 62: 894-899.
- 11) 太田壽城, 芳賀 博, 長田久雄, 他. 地域高齢者のためのQOL質問票の開発と評価. 日本公衆衛生雑誌 2001; 48: 258-267.
- 12) 高間由美子, 杉原利治. 高齢者の社会参加と生きがいに関する研究: 2. 高齢者の社会参加の現状と問題点. 東海女子短期大学紀要 2003; 29: 35-44.
- 13) 高間由美子, 杉原利治. 高齢者の社会参加と生きがいに関する研究: 3. 高齢者の社会参加の課題. 東海女子短期大学紀要 2004; 30: 65-75.
- 14) 小窪輝吉, 高橋信行, 田畑洋一. 過疎地における高齢者の孤独感と個人的, 社会的特性との関連: 健康状態, 対人的ネットワーク, 社会参加との関連を中心に. 鹿児島経済大学社会学部論集 1997; 15: 1-20.
- 15) 松本光太郎. 高齢者の生活において外出が持つ意味と価値: 在宅高齢者の外出に同行して. 発達心理学研究 2005; 16: 265-275.
- 16) Lawton, MP. Environment and aging: theory revisited. In Scheidt RJ, Windley PG. (Eds.) Environment and Aging Theory: a Focus on Housing. Westport: Greenwood Press, 1998; 1-31.

- 17) Wahl HW, Weisman GD. Environmental gerontology at the beginning of the new millennium: reflections on its historical, empirical, and theoretical development. The Gerontologist 2003; 43: 616-627.
- 18) 松本光太郎. 環境老年学の軌跡とその潜在性：高齢者における環境体験の探求に向けて. 都市・建築学研究（九州大学大学院人間環境学研究院紀要）2005; 7: 29-37.

（付表1） 社会的活動項目

-
- Q1. 近所づきあい
 - Q2. 生活用品や食料品の買い物
 - Q3. デパートなどでの買い物（少し離れた場所へ出かけての買い物）
 - Q4. 近くの友人・友だちを訪問すること
 - Q5. 近くの親戚を訪問すること
 - Q6. 遠くの友人・友だちを訪問すること
 - Q7. 遠くの親戚を訪問すること
 - Q8. 国内旅行
 - Q9. 外国旅行
 - Q10. 神社仏閣、教会などへお参りや礼拝に行くこと
 - Q11. スポーツや運動
 - Q12. レクリエーション運動
 - Q13. 地域の行事（お参り・盆踊りなど）への参加
 - Q14. 町内会や自治会の活動
 - Q15. 町内会・自治会の役員としての活動
 - Q16. 老人会（老人クラブ）の活動
 - Q17. 趣味の会など仲間うちの活動
 - Q18. 社会奉仕（ボランティア活動）
 - Q19. 特技や経験を他人に伝える活動
 - Q20. 高齢者学級・高齢者大学などへの活動
 - Q21. カルチャーセンターなどでの学習活動
 - Q22. 市民講座・各種研修会・講演会などへの参加
 - Q23. シルバー人材センター（能力の活用）などの活動
 - Q24. 市民活動・住民運動・消費者運動・環境運動などの団体への参加
 - Q25. 政治団体（後援会など）への参加
 - Q26. インターネット上のサークル
 - Q27. PTAのOB会への参加
 - Q28. 会社のOB会への参加
 - Q29. 宗教団体の活動
 - Q30. 小中学校の学習やクラブの指導や支援
 - Q31. 学校の授業参観
 - Q32. 各種協議会などの委員
 - Q33. 卒業した学校の同窓会
 - Q34. 研修会や講座などの講義や講演の講師
 - Q35. その他（ ）
-

Social activity and relevant factors in the elderly: Focus on members of senior manpower center and senior citizen's club

Hisao OSADA^{1*}, Takako SUZUKI^{2*}, Kazuko TAKATA^{3*} and Akitoshi NISHISHITA^{4*}

Key words : Community Elderly, Social Activities, QOL questionnaire

Objectives The purpose of this study was to investigate and classify major social activities in community elderly. We also clarified reliability, dependence on the age bracket, changes in activity frequency over the past year, and relation between social activities and QOL using a questionnaire.

Methods The subjects were 1,344 individuals aged 60 years or more, living in A area of metropolitan Tokyo. All were members of a Silver Human Resources Center or a Senior Citizen's Club.

Results At first, using explanatory factor analysis for social activities, 14 items were selected and 4 factors were constructed ("participating with community activities", "visiting relatives or friends", "participating with group activities", "hobby activities")., and the validity of logical factors and internal consistency were confirmed. The resulting questionnaire had high discrimination and a clear factor structure. Cronbach's α of sub-scales were 0.73~0.87.

Then gender difference and age differences were compared. On comparison, there was significantly more frequent activity ("visiting relatives or friends", "hobby activities") in males than in females. With age, significantly lower activity ("visiting relatives or friends") was noted in 70-74 year old females than in the other ages. At resurvey after one year, medium positive correlation coefficients were found among sub-scales and ages in both males and females. There were also significant correlations between sub-scales of social activities and a "positive mental attitude" with the QOL questionnaire in both sexes, and between sub-scales and "satisfaction with human support" in females.

Conclusion The results suggest that the major sources of social activities in community elderly revolve around 4 factors and 14 items, with distinct relations to QOL. In the future, multi-communities should be examined for community gaps, and also to distinguish between psychic and physical well-being.

^{1*} J. F. Obirlin University, Graduate Program in Gerontology

^{2*} Health Support Center, Waseda University

^{3*} National Institute of Health and Nutrition

^{4*} Tokyo Keizai University